

研究主題

子どもの気付きを最大限に活かして書く力を育てる授業
 ～ICTの活用とメタ認知を促す活動を通して～

新潟市立東新潟中学校
 小池 裕己 (128年度)

主張

「書くこと」に対して抵抗感を示す生徒が多く、「内容的にまとまりのある文章を書く」問題の無解答率が高い。また、「読み手に伝わるように書く」ことに課題があり、正答とならない。その要因としては、生徒が、自身の書いた英文が、「読み手に伝わるものであるか」までは認知できないことにあると考えられる。また、何となく伝わらないとは感じて、自身の書いた英文を自力で校正・推敲することまではできないことも、要因の一つであると考えられる。そこで、次の2つの手立てを講じ、生徒の「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力」の向上をねらった。

【手立て1：ICT（翻訳アプリ）の活用】

生徒に、自身の書いた英文は、「伝えたいと意図したことが伝わる英文であるか」を客観的に認知させたいと考えた。そこで、生徒に、自身が書いた英文を翻訳アプリに打ち込ませ、表示された日本語を確認させた。その後、自分が伝えたいことを日本語で翻訳アプリに打ち込ませ、表示された英文を確認させることで、「伝えたいことを伝えるための正しい表現（文構造や語順）の英文」を確認させた。

【手立て2：チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動】

教師の手を加えずに、校正・推敲することができるように、生徒に、英作文における自身の課題に気付かせたいと考えた。そこで、チェックシートを用いて、自身が書いた英作文について、正しい英作文と見比べながら振り返らせた。チェックシートの項目は、「内容的にまとまりのある文章を書く」上で必要な「文章構成や内容」と、「読み手に伝わるように書く」上で必要な「表現（文構造や語順）」に関するものとした。

これらの2つの手立ての有効性について、生徒が「最初に書いた英作文」と、翻訳アプリに表示された正しい英文を覚える機会を設定せず、生徒が「2つの手立てを経て書いた英作文」を、「書くことができた文の数」、「伝えたいことが伝えられた文の数」、「主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数」の3つの観点から比較・検証した結果、全ての観点において、「学級平均数」が増加し、個々で見ても、「増加した生徒数の割合」が高かった。

このことから、「ICT（翻訳アプリ）の活用」と、「チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動」の2つの手立ては、「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力」の向上において、有効であったと言える。

1 研究主題設定の理由

(1) 主題設定に至る子どもの実態と課題

対象となる学級（2年3組）は、授業において、様々な活動に前向きに取り組むが、「書くこと」に対しては、抵抗感を示す生徒が多い。彼らが1年次に受けた令和5年度の標準学力調査（CRT）においても、表1の通り、「書くこと」の無解答率が高い。中でも、「3文以上の自己表現の英作文の問題（＝内容的にまとまりのある文章を書く問題）」の無解答率は25%と高く、主文は書いても、その具体的な説明の文、さらにまとまりのある内容でもう1文以上を加えるとすると、正答率が下がっていく。この問題の出題のねらいは、「相手に伝わるように書く」ことであるが、生徒の書く文は、「主語・動詞・目的語が抜けた文」、「主語・動詞・目的語の語順が違う文」が目立ち、「伝えたいことが読み手に伝わる文」とはなっていないものが多く見受けられた。これらのことから、「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力」の向上を図りたいと考えた。

表1 【令和5年度の標準学力調査（CRT）結果】

【領域別】の無解答率と正答率						左記の結果から分かる課題
聞くこと		読むこと		書くこと		
無解答率	正答率	無解答率	正答率	無解答率	正答率	⇒ ・「書くこと」の無解答率が高い
4.2%	66.1%	2.7%	60.6%	14.9%	52.9%	
【3文以上の自己表現の英作文の問題（無解答率25%）】 の各文の正答率						⇒ ・「内容的にまとまりのある文章を書く力」の向上が必要 ・「読み手に伝わるように書く力」の向上が必要（「主語・動詞・目的語が抜けた文」「主語・動詞・目的語の語順が違う文」が多いため読み手に伝わらない）
主文		具体的な説明の文		追加の文		
65.3%		55.6%		41.7%		

(2) 課題解決のための方策（研究内容・方法）

(1) で挙げた課題解決のために、表2で示す**指導方法と手立て（表の太字部分）**で英作文の実践を行う。
 「書くこと」の無解答率が高いという点については、「新潟市授業づくりサポート ver.1（令和5年度12月新潟市教育委員会作成）」の「新潟市が目指す授業のあり方」を参考とし、「モデル文を教え、書く内容のメモを与える」という従来の指導方法ではなく、「モデル文を教えず、書く内容を自由にする」という方法に変えることとした。「自由な内容と表現での英作文」にすることで、生徒が受け身の状態から、主体的に取り組みやすくなると考えた。

また、「内容的にまとまりのある文章を書く力」と「読み手に伝わるように書く力」の不足については、生徒が、自身の書いた英文が、「読み手に伝わるものであるか」までは認知できないこと、また、何となく伝わらないとは感じて、自身の書いた英文を自力で校正・推敲することまではできないことに要因があると考えた。そこで、「ICT（翻訳アプリ）の活用」により、自身の書いた英文は、「伝えたいと意図したことが伝わる英文であるか」を客観的に認知させようと考えた。また、「チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動」により、教師の手を加えずに、校正・推敲することができるように、英作文における自身の課題に気付かせたいと考えた。

表 2

実態から見えた課題①	従来の指導方法	課題	今回の指導方法	考えられる効果
・「書くこと」の無解答率が高い	・モデル文を教える	△モデル文の表現をほぼそのまま使えば書けるため、「文章構成や内容、表現（文構造や語順）」を探究していく必要がない。	・モデル文を教えない	○伝えたいことを伝えるための「文章構成や内容、表現（文構造や語順）」を探究する必要がある、気付きがある。
	・書く内容のメモを与える	△生徒が伝えたい内容ではなく、決められた内容の訳をする活動になってしまい、興味・関心を持ちづらい。	・書く内容を自由にする	○生徒が伝えたい内容のため、興味・関心を持ちやすい。
△生徒が受け身になる			○生徒が主体的になる	
実態から見えた課題②	課題解決のための手立て	具体		考えられる効果
・「読み手に伝わるように書く力」の向上が必要 ・「内容的にまとまりのある文章を書く力」の向上が必要	・ICT（翻訳アプリ）の活用	生徒に、自身が書いた英文を翻訳アプリに打ち込ませ、表示された日本語を確認させる。その後、自分が伝えたかったことを日本語で翻訳アプリに打ち込ませ、表示された英文を確認させる。		○自身の書いた英文は、「伝えたいと意図したことが伝わる英文であるか」を客観的に認知することができる。 ○正しい表現（文構造や語順）について、生徒が気付くことができる。 ○「伝えたいことを伝えるための正しい表現」を自身でじっくりと探究することができる。
	・チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動	「内容的にまとまりのある文章を書く」上で必要なポイント（文章構成や内容）と「読み手に伝わるように書く」上で必要なポイント（表現（文構造や語順））をチェック項目とした「チェックシート」を作成し、生徒に、自身が書いた英作文について、各チェック項目を確認させ、振り返らせる。		○英作文における自身の課題に気付くことができる。 ○正しい文章構成や内容、表現（文構造や語順）について、生徒が気付くことができる。 ○理解した自身の課題を、次回の英作文に活かすことができる。
検証方法：同じテーマについて、「最初に書いた英作文（モデル文を教えず、書く内容を自由にする）」と「2つの手立てを経て書いた英作文（翻訳アプリに表示された正しい英文を覚える機会は設定しない）」を、 チェックシートの3つの項目「②書くことができた文の数」「⑧伝えたいことが伝えられた文の数」「⑬主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数」の「学級平均数の増加」と「増加した生徒数の割合」から検証する。				

「新潟市授業づくりサポート ver.1（令和5年度12月新潟市教育委員会作成）」
 「新潟市が目指す授業のあり方」

これから 先生主導 先生が決める	これからは 子ども主導 子どもに委ねる	先生が教える 先生が評価 教師-児童生徒 中心	子どもが学び取る 子どもが評価 児童生徒-児童生徒 中心	一斉一律（同じことを同じペースで） 正解は一つ よいか悪いか	個別化・個性化 正解はない 最適解・納得解	画一的（みんなが同じ姿） 失敗させない Must/Should	多様性（みんなが違っていい） Try and Error May/Can
------------------------	---------------------------	-------------------------------	------------------------------------	--------------------------------------	-----------------------------	---------------------------------------	--

研究仮説
 ICT（翻訳アプリ）の活用とチェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動を行うことで、自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力が育成されるだろう。

2 研究の実際

「自由な内容と表現での英作文」における「ICT（翻訳アプリ）の活用」と「チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動」については、具体的に表3のテーマと手順で行った。

表 3

【テーマ】あなたは、ALTのリード先生の息子であるレイのために、お気に入りの日本の絵本を紹介することになりました。「①お気に入りの日本の絵本」を1つ取り上げ、「②その絵本のあらすじ」と「③その絵本が好きな理由」について、まとまりのある文章を5文以上の英語で書きなさい。

目的意識・相手意識を持つ	【手順0】 テーマについて、ALTからのビデオメッセージを視聴し、内容を確認する。
内容を整理する	【手順1】 テーマの内容（①～③）について、ペアの人に日本語でインタビューをしてもらい、アイディアマップを作成してもらう。（5分）
アウトプット（話す）	【手順2】 アイディアマップをもとに、テーマの内容について、別のペアの人に英語で話して伝える。（※ペアの人に、自分のiPadを渡し、動画を撮影してもらう。）
文の順序を整理する	【手順3】 動画を見ながら、自分の話した英文についてペアで確認する。（※どのような順序で話をするか相手に伝わりやすいか考えながら、アイディアマップのそれぞれの情報の近くに、赤ペンで番号を書く。足した方がテーマの内容がより相手に伝わりやすくなる情報があれば、赤ペンで書き加える。）

<p>アウトプット (書く1回目)</p>	<p>【手順4】 アイディアマップを見ながら、テーマの指示に従い、実際に英文を書く。(10分) (※手順3を踏まえて、手順2で話した英文と順序が変わったり、情報が増えたりしても良い。 また、話した英文のミスに気付いた場合は直しても良い。)</p>																
<p>自身の書いた英文は、「伝えたいと意図したことが伝わる英文であるか」を客観的に認知する</p> <p>表現(文構造や語順)の探究</p> <p>【手立て1: ICT(翻訳アプリ)の活用】</p>	<p>【手順5】 手順4で自分が書いた英文を、翻訳アプリに打ち込み、表示された日本語を確認し、自分が伝えたいことが伝えられた英文には赤ペンで○を、伝えられなかった英文には△をつける。</p> <p>【生徒の様子(発言)】</p> <p>発言1:「文法や語順が曖昧で、何となくで書いたけど、結構伝わった。」 発言2:「登場人物を紹介していないのに、『○○がかわいいとかかっこいいから好き。』って言っても、『○○って誰?』ってなるよね?」 発言3:「知らない単語や覚えていない単語を、知っている単語を組み合わせで作ったら伝わった。」 発言4:「発音を何となくで書いたり、ヘボン式ローマ字で書いたら意外と伝わった。」</p>	<p>【生徒の気付き(生徒の発言から、教師がまとめ、全体に共有したもの)】</p> <p>気付き1:全て正確でなくとも、まずは書いてみる 気付き2:読み手に伝わりやすい文の順序を考える 気付き3:単語が分からなければ、知っている単語で置き換えてみる 気付き4:正確でなくとも、発音を頼りにヘボン式ローマ字等で書いてみる</p>															
	<p>【手順6】 手順4で伝えなかった内容を日本語で書く。その日本語を翻訳アプリに打ち込み、正しい英文を確認する。</p>																
	<p>【生徒の様子(発言)】</p> <p>発言5:「表示された英文が長くて分かりづらい。」 「表示された英文はまだ習っていない文法表現が多くて、自分でも全然理解できない。」 「伝えたい日本語をちょっと変えて打ってみよう。」 「習った文法の日本語の意味を思い浮かべながら打つと、見たことがある英文が出てくる。」</p>	<p>【生徒の気付き(生徒の発言から、教師がまとめ、全体に共有したもの)】</p> <p>気付き5:伝えたい日本語を短く、簡単に(～は～です。/～は～を～します。)変えてみる</p>															
<p>文章構成や内容、表現(文構造や語順)についてのメタ認知(1回目)</p> <p>英作文における自身の課題に気付く</p> <p>【手立て2:チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動】</p>	<p>【手順7】 手順4で自分が書いた英文について、手順6で確認した正しい英文と見比べながら、ペアで次の項目について確認する。</p>																
	<table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">チェックシートの項目</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① Opening - Body - Closing の構成になっている</td> <td>⑨ 主語が抜けた文の数</td> </tr> <tr> <td>② 書くことができた文の数</td> <td>⑩ 動詞が抜けた文の数</td> </tr> <tr> <td>③ 「お気に入りの日本の絵本のタイトル」を書けた</td> <td>⑪ 目的語が抜けた文の数</td> </tr> <tr> <td>④ 「絵本のあらすじ」を書けた</td> <td>⑫ 主語・動詞・目的語の語順が違った文の数</td> </tr> <tr> <td>⑤ 「絵本のあらすじ」の文の数</td> <td>⑬ 主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数</td> </tr> <tr> <td>⑥ 「絵本が好きな理由」を書けた</td> <td rowspan="3">⑭ 感想(できたこと・できなかったこと・次回できるようになりたいこと・そのためにやるべきこと等)</td> </tr> <tr> <td>⑦ 「絵本が好きな理由」の文の数</td> </tr> <tr> <td>⑧ 伝えたいことが伝えられた文の数</td> </tr> </tbody> </table>		チェックシートの項目		① Opening - Body - Closing の構成になっている	⑨ 主語が抜けた文の数	② 書くことができた文の数	⑩ 動詞が抜けた文の数	③ 「お気に入りの日本の絵本のタイトル」を書けた	⑪ 目的語が抜けた文の数	④ 「絵本のあらすじ」を書けた	⑫ 主語・動詞・目的語の語順が違った文の数	⑤ 「絵本のあらすじ」の文の数	⑬ 主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数	⑥ 「絵本が好きな理由」を書けた	⑭ 感想(できたこと・できなかったこと・次回できるようになりたいこと・そのためにやるべきこと等)	⑦ 「絵本が好きな理由」の文の数
チェックシートの項目																	
① Opening - Body - Closing の構成になっている	⑨ 主語が抜けた文の数																
② 書くことができた文の数	⑩ 動詞が抜けた文の数																
③ 「お気に入りの日本の絵本のタイトル」を書けた	⑪ 目的語が抜けた文の数																
④ 「絵本のあらすじ」を書けた	⑫ 主語・動詞・目的語の語順が違った文の数																
⑤ 「絵本のあらすじ」の文の数	⑬ 主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数																
⑥ 「絵本が好きな理由」を書けた	⑭ 感想(できたこと・できなかったこと・次回できるようになりたいこと・そのためにやるべきこと等)																
⑦ 「絵本が好きな理由」の文の数																	
⑧ 伝えたいことが伝えられた文の数																	
<p>【生徒の様子(発言)】</p> <p>発言6:「構成ができていない。」 発言7:「好きな理由が書けていない。」 発言8:「主語・動詞・目的語がない文や逆にいくつもある文もある。」 発言9:「翻訳アプリで単語1つ1つの意味自体は正しく表示されるのに、文になると伝えたいことが伝わらなくなるのは語順が違うからだ。」</p>	<p>【生徒の気付き(生徒の発言から、教師がまとめ、全体に共有したもの)】</p> <p>気付き6:Opening - Body - Closing の構成で書く 気付き7:指定された内容を書く 気付き8:主語・動詞・目的語が抜けないようにする 気付き9:主語・動詞・目的語を正しい語順で書く</p>																
<p>アウトプット (書く2回目)</p>	<p>【手順8】 テーマ(【手順4】と同じ)の指示に従い、再度英文を書く。(10分)</p>																
<p>文章構成や内容、表現(文構造や語順)についてのメタ認知(2回目)</p> <p>英作文における自身の課題に気付く</p>	<p>【手順9】 手順8で自分が書いた英文について、ペアで手順7の項目について確認する。</p>																
	<p>【生徒の様子(記述)】</p> <p>記述1:「前回よりも多く書けて嬉しかった。」(「気付き1」と対応) 記述2:「好きな理由(を説明する文)の入り方が前回より上手くなった。」(「気付き2」と対応) 記述3:「分からない単語を自分で違う単語に言い換えることができた。」(「気付き3」と対応) 記述4:「文を分けたらとても書きやすくなった。」(「気付き5」と対応) 記述5:「日本語を簡単にしたり、文を短くしたりすることで、正しい文にしやすくなった。」(「気付き5」と対応) 記述6:「日本語を短く、簡単に自分が分かる文で書くことができた。」(「気付き5」と対応)</p>																

【チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動】	記述7：「(英語で表現するには) 難しいと思っていた文も意外と今までの知識で作ることができた。」(「気付き5」と対応)
	記述8：「Opening - Body - Closingの構成で書くことができた。」(「気付き6」と対応)
	記述9：「前回書けなかった好きな理由を書くことができた。」(「気付き7」と対応)
	記述10：「前回よりも間違いが減った。」(「気付き8」「気付き9」と対応)
	記述11：「スペリングが間違っている単語もあったが、全て正しく(主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文)を書くことができた。」(「気付き8」「気付き9」と対応)
	記述12：「全部伝わったのが嬉しかった。」
	記述13：「全て伝わったし、書ける文の数も増えて良かった。」
	記述14：「成長できて良かった。」
	記述15：「スペリングミスが少しあったので完璧にしたい。」
	記述16：「語順が違う文があるから直していきたい。」
記述17：「まだ日本語を簡単にできないところがあって、あらすじをうまく書けなかったので、もっと簡単に直したい。」	

3 結論

表4

チェックシートの項目	手順4の英作文の学級平均数	手順8の英作文の学級平均数	手順4から手順8で文数が増加した生徒数の割合
②書くことができた文の数 (単語のスペリングミスや文法ミスは問わない)	4.8文	7.7文(+2.9文)	92%
⑧伝えたいことが伝えられた文の数 (翻訳アプリに表示された日本語を根拠とする)	1.7文	5.0文(+3.3文)	85%
⑬主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数	2.7文	5.8文(+3.1文)	92%

表4の通り、「書くことができた文の数」、「伝えたいことが伝えられた文の数」、「主語・動詞・目的語があり、語順も正しい文の数」の3つの項目の「学級平均数」は、2つの手立てを経て増加した。また、「2つの手立てを経て書いた英作文(手順8の英作文)」については、「伝えたいことが伝えられた文の数」が、テーマに示した目標値の5文以上となった。さらに、個々で見ても、各項目の「増加した生徒数の割合」は、約90%と高い割合であった。

また、「2 研究の実際」の「生徒の様子(表の太字部分)」や「生徒の気付き(表の太字部分)」から分かるように、生徒は、2つの手立てを経て、想定よりも多くの気付きを得ていた。さらに、各生徒の気付きを教員が拾い上げ、まとめ、共有することで、生徒は気付きを学びとして獲得し、それらの学びを活かして次の英作文に取り組むことができた。そして、生徒は、自身の成長を実感し、その喜びを感じることもできた。

これらのことから、「ICT(翻訳アプリ)の活用」と「チェックシートを用いたメタ認知を促す振り返り活動」は、「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力」の向上において有効であったと言える。

4 研究の反省・今後の課題

(1) 伝えたいことを短く、簡単な日本語に変える力

表5

チェックシートの項目	目標値	達成度
⑧伝えたいことが伝えられた文の数	5文	55%

今回の実践を通しての、生徒の最大の気付きは、「英作文をする際に、伝えたいことを短く、簡単な日本語に変えることで、既習の知識を用いて、正しい英文が作りやすくなる」という点であると考えられる。しかし、「伝えたいことが伝わる英文」を5文以上書くことができたのは、表5の通り、27人中55%の生徒であった。残りの44%の生徒は、「伝えたいことを短く、簡単な日本語に変える」こと自体に難しさを抱えている様子が見られた。それができないために、翻訳アプリに表示される英文が、未習の文法表現を多く含む、長いものになってしまう、生徒自身では理解できない様子があった。そこで、授業内の帯活動として、アイディアマップのキーワードをもとに、日本語を考えてから、英文にするなど、「伝えたいことを短く、簡単な日本語に変え、既習の文法を用いて、伝えたいことが伝わる英文を作る」練習を繰り返す。それにより、生徒の「自分が伝えたいことを読み手に伝わるように書く力」をさらに伸ばしていきたい。

(2) 初見のテーマにも対応できる力

今回の実践では、手立てを打つ前後に、同様のテーマについて書いた2つの英作文の変化を検証した。手立てを経て探究した英文を、覚える機会を設定しなかったものの、生徒によっては、覚えていた可能性もある。また、今後、初見のテーマでも、「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く」ことができるようになってほしいと考える。そこで、2年次の定期テスト2において、次のような初見の「内容的にまとまりのある文章を書く問題」を出題した。

あなたの好きなことについて、「① 趣味」を1つ取り上げ、「② それをすることが好きな理由」と「③ 今後したいこと」について、まとまりのある文章を3文以上の英語で書きなさい。

表6

チェックシートの項目	目標値	定期テスト2の英作文の学級平均数	達成度
⑧伝えたいことが伝えられた文の数	3文	3.0文	74%

結果は、表6の通り、「伝えたいことが伝わる英文」を3文以上書くことができたのは、27人中74%の生徒であった。また、学級平均数も3.0文となった。このことから、今後も手立てを活用した英作文の実践を継続することで、「自分が伝えたいことを内容的にまとまりのある文章として読み手に伝わるように書く力」を、さらに伸ばしていくことができると考える。